

## I. 重要な会計方針

### 1. 有形固定資産及び無形固定資産の評価基準及び評価方法

#### ① 有形固定資産……………取得原価

ただし、開始時の評価基準及び評価方法については、次のとおりです。

##### ア. 昭和 59 年度以前に取得したもの……………再調達原価

ただし、道路、河川、及び水路の敷地は備忘価格 1 円としています。

##### イ. 昭和 60 年度以後に取得したもの

取得原価が判明しているもの……………取得原価

取得原価が不明なもの……………再調達原価

ただし、取得原価が不明な道路、河川、及び水路の敷地は備忘価格 1 円としています。

#### ② 無形固定資産……………取得原価

ただし、開始時の評価基準及び評価方法については、次のとおりです。

取得原価が判明しているもの……………取得原価

取得原価が不明なもの……………再調達原価

### 2. 有価証券等の評価基準及び評価方法

#### ① 市場価格のある有価証券等……………会計年度末における市場価格

#### ② 市場価格がない有価証券等……………取得原価

ただし、市場価格のないものについて、実質価額が著しく低下した場合には、相当の減額を行うこととしています。

なお、実質価額の低下割合が30%以上である場合には、「著しく低下した場合」に該当するものとしています。

### 3. 有形固定資産等の減価償却の方法

#### ① 有形固定資産（リース資産を除きます。）……………定額法

#### ② 無形固定資産（リース資産を除きます。）……………定額法

#### ③ 所有権移転ファイナンス・リース取引に係るリース資産（リース期間が1年以内のリース取引及びリース契約1件あたりのリース料総額が300万円以下のファイナンス・リース取引を除きます。）

……………自己所有の固定資産に適用する減価償却方法と同一の方法

### 4. 引当金の計上基準及び算定方法

#### ① 徴収不能引当金

過去 5 年間の平均不納欠損率により、徴収不能見込額を計上しています。

#### ② 退職手当引当金

本年度末に特別職を含む全職員（本年度末退職者を除く）が普通退職した場合の退職手当要支給額から、組合への加入時以降の負担金の累計額から既に職員に対し退職手当として支給された額の総額を控除した額を積立持分相当額として控除した額を計上しております。

③ 損失補償等引当金

履行すべき額が確定していない損失補償債務のうち、地方公共団体の財政の健全化に関する法律に規定する将来負担比率の算定に含めた将来負担額を計上しています。

④ 賞与等引当金

翌年度6月支給予定の期末手当及び勤勉手当並びにそれらに係る法定福利費相当額の見込額について、それぞれ本会計年度の期間に対応する部分を計上しています。

## 5. リース取引の処理方法

① ファイナンス・リース取引

ア. 所有権移転ファイナンス・リース取引（リース期間が1年以内のリース取引及びリース総額が300万円以下のファイナンス・リース取引を除きます。）

通常の売買取引に係る方法に準じて会計処理を行っています。

イ. ア以外のファイナンス・リース取引

通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っています。

② オペレーティング・リース取引

通常の賃貸借取引に係る方法に準じて会計処理を行っています。

## 6. 資金収支計算書における資金の範囲

現金（手許現金及び要求払預金）及び現金同等物（3ヶ月以内の短期投資等）を資金の範囲としています。

このうち現金同等物は、短期投資の他、出納整理期間中の取引により発生する資金の受払いを含んでいます。

## 7. その他財務書類作成のための基本となる重要な事項

① 消費税等の会計処理

税込方式によっております。

② 物品及びソフトウェアの計上基準

物品については、取得価額又は見積価格が50万円（美術品は300万円）以上の場合に資産として計上しています。

ソフトウェアについても物品の取り扱いに準じています。

③ 資本的支出と修繕費の区分基準

資本的支出と修繕費の区分基準については、金額が60万円未満であるとき、又は

固定資産の取得価額等のおおむね 10%未満相当額以下であるときに修繕費として処理しています。

## II. 重要な会計方針の変更等

### 1. 会計方針の変更

水道事業会計、病院事業会計の出資金については、従来出資金に計上していましたが、令和元年 8 月改定の「統一的な基準による地方公会計マニュアル」で明記された基準に則り、本年度から投資及び出資金その他に区分し計上しました。

この変更により、投資及び出資金その他に 6,271,231 千円計上しております。

## III. 重要な後発事象

該当なし

## IV. 重要な偶発債務

### 1. 保証債務及び損失補償債務負担の状況

他の団体（会計）の金融機関等からの借入債務に対し、保証を行っています。

団体（会計）名	確定債務額	履行すべき額が確定していない 損失補償債務等		総額
		損失補償等 引当金計上額	貸借対照表 未計上額	
茨城県信用保証協会	－ 千円	1,752 千円	669,450 千円	671,202 千円
合計	－ 千円	1,752 千円	669,450 千円	671,202 千円

## V. 追加情報

### 1. 財務書類の内容を理解するために必要と認められる事項

#### (1) 一般会計等財務書類の対象範囲

一般会計

#### (2) 出納整理期間

地方自治法第 235 条の 5 に基づき出納整理期間が設けられている会計においては、出納整理期間における現金の受払い等を終了した後の計数をもって会計年度末の計数

としています。

(3) 財務書類の表示金額単位

千円未満を四捨五入して表示しているため、合計金額が一致しない場合があります。

(4) 地方公共団体財政健全化法における健全化判断比率の状況

実質赤字比率	－	%
連結実質赤字比率	－	%
実質公債費比率	4.2	%
将来負担比率	－	%

(5) 利子補給等に係る債務負担行為の翌年度以降の支出予定額

利子補給に係るもの	19,349	千円
P F Iに係るもの	－	千円

(6) 繰越事業に係る将来の支出予定額

継続費通次繰越額		
（一般会計）	157	千円
繰越明許費		
（一般会計）	386,383	千円
事故繰越額		
（一般会計）	373	千円

(7) 過年度の修正事項

過年度の固定資産の計上に誤りがあったため、本年度において修正を行っています。  
この修正により、本年度の貸借対照表において、インフラ資産建設仮勘定が 2,981 千円  
減少し、行政コスト計算書において臨時損失が同額計上されています。

2. 貸借対照表に係る事項

(1) 売却可能資産の範囲及び内訳

該当なし

(2) 減債基金に係る積立不足額

該当なし

(3) 基金借入金（繰替運用）

該当なし

(4) 臨時財政対策債

臨時財政対策債は、地方交付税として交付すべき財源が不足した場合に、市において不足額を補てんするため発行する地方債のことです。

臨時財政対策債の元利償還金相当額は、その全額が後年度地方交付税の基準財政需要額に算入されます

貸借対照表計上の地方債当期末残高 1,838,299 千円のうち、臨時財政対策債の当期末残高は 270,770 千円となっております。

(5) 地方交付税措置のある地方債のうち、将来の普通交付税の算定基礎である基準財政需要額に含まれることが見込まれる金額

2,526,720 千円

(6) 将来負担に関する情報（地方公共団体財政健全化法における将来負担比率の算定要素）

イ.	標準財政規模	11,174,299 千円
ロ.	元利償還金・準元利償還金に係る基準財政 需要額算入額	844,353 千円
ハ.	将来負担額	9,315,470 千円
ニ.	充当可能基金額	10,452,165 千円
ホ.	特定財源見込額	1,117,065 千円
ヘ.	地方債現在高等に係る基準財政需要額算入 見込額	5,678,835 千円

(7) 地方自治法 234 条の 3 に基づく長期継続契約で貸借対照表に計上されたリース債務金額

615,104 千円

3. 行政コスト計算書に係る事項

該当なし

#### 4. 純資産変動計算書に係る事項

純資産における固定資産等形成分及び余剰分（不足分）の内容

##### ① 固定資産等形成分

固定資産の額に流動資産における短期貸付金及び基金などを加えた額を計上しています。

##### ② 余剰分（不足分）

純資産合計額のうち、固定資産等形成分を差し引いた金額を計上しています。

#### 5. 資金収支計算書に係る事項

##### (1) 基礎的財政収支

▲766,218 千円

##### (2) 既存の決算情報との関連性

	収入（歳入）	支出（歳出）
歳入歳出決算書	20,174,272 千円	19,102,673 千円
会計の範囲の相違に伴う差額	－ 千円	－ 千円
繰越金に伴う差額	▲642,613 千円	－ 千円
資金収支計算書	19,531,660 千円	19,102,673 千円

地方自治法第 233 条第 1 項の規定に基づく歳入歳出決算書は「一般会計」を対象範囲としているのに対し、資金収支計算書は「一般会計等」を対象範囲としているため、歳入歳出決算書と資金収支計算書は一部の特別会計（那珂地方公平委員会特別会計）の分だけ相違します。

また、繰越金については、歳入歳出決算書では収入として計上しますが、公会計では計上しないため、その分だけ相違します。

##### (3) 資金収支計算書の業務活動収支と純資産変動計算書の本年度差額との差額の内訳

資金収支計算書の業務活動収支	2,404,539 千円
減価償却費	▲1,758,879 千円
減損損失	－ 千円
徴収不能引当金の増減額	387 千円
退職手当引当金の増減額	▲83,760 千円
賞与引当金の増減額	▲907 千円
未収金の増減額	▲17,290 千円
固定資産除売却損益	1,719 千円
資本金的国県等補助金等	192,536 千円

未払費用の増減額	－	千円
その他の資産・負債の増減額	▲142,559	千円
<hr/>		
純資産変動計算書の本年度差額	595,787	千円

(4) 一時借入金

資金収支計算書上、一時借入金の増減額は含まれておりません。

なお、一時借入金の限度額及び利子額は次のとおりです。

一時借入金の限度額	1,500,000	千円
一時借入金に係る利子額	－	千円

(5) 重要な非資金取引

重要な非資金取引は以下のとおりです。

新たに計上したファイナンス・リース取引に係る資産及び負債の額	580,080	千円
無償取得	525	千円